

【書評】

坂井誠亮著『戦後小学校社会科における学習評価に関する史的研究
—奈良の社会科を事例として—』(DTP出版, 2014年刊, 225頁) 3,400円+税

米田 豊
(兵庫教育大学)

坂井誠亮氏は、立命館大学文学部卒業後、奈良県の公立学校(小学校)の教員として教職生活のスタートを切れ、現在は北海道教育大学旭川校の教授として活躍中である。この間、奈良県教育委員会より内地留学派遣として、兵庫教育大学大学院修士課程(社会系コース)に学ばれ、修士の学位を得られている。また、兵庫教育大学連合学校教育学研究科(博士課程)にも学ばれ、博士の学位も得られている。なお、北海道教育大学に出られるまでの1年間は、奈良女子大学附属小学校に勤務されていた。

坂井氏の問題意識は、終始一貫して「学習評価」である。それは大きく次の三つに分類できる。

- (1) 奈良県初期社会科カリキュラム(桜井プラン、奈良プラン、田原本プラン)における学習評価
- (2) 奈良県小学校教科等研究会社会科部会社会科診断テストにおける学習評価
- (3) 生活科を含む社会認識教育における「思考・判断・表現」を中心とした学習評価

本書は、(1)(2)の研究成果を兵庫教育大学連合学校教育学研究科に提出された「戦後奈良県における小学校社会科の学習評価に関する研究—初期社会科プラン及び社会科診断テストを中心として—」に加筆修正を行ったものである。

本書の構成は、次のとおりである。

序章 研究の目的、意義と方法

第1章 「桜井プラン」における学習評価

第1節 「桜井プラン」の概要

第2節 「桜井プラン」における目標と評価基準の特質

第3節 「桜井プラン」における評価テスト問題の特質

第2章 「奈良プラン」における学習評価

第1節 「奈良プラン」における目標と評価の体系

第2節 「奈良プラン」の授業場面での学習評価の特質

第3節 「奈良プラン」における評価テスト問題の特質

第3章 奈良県初期社会科カリキュラムにおける学習評価

第1節 奈良県初期社会科カリキュラムの概要

第2節 『奈良県社会科作業単元基底要覧』における学習評価の特質

第3節 『奈良県社会科教育課程』における評価テスト問題の特質

第4章 「田原本プラン」における学習評価

第1節 「田原本プラン」の概要

第2節 「田原本プラン」の授業場面での学習評価の特質

第3節 「田原本プラン」における評価テスト問題の特質

第5章 奈良県初期社会科におけるテスト問題の変遷過程

第6章 第1回奈良県小学校社会科診断テスト実施の経緯とテスト問題分析

第1節 奈良県小学校社会科診断テスト実施の経緯

第2節 第1回奈良県小学校社会科診断テストの分析

第3節 テスト問題事例分析

第7章 奈良県小学校社会科診断テストにおける地理的領域のテスト問題分析

第1節 地理的領域の内容知(国土・郷土・環境)に関するテスト問題分析

第2節 地理的領域の内容知(日本の産業)に関するテスト問題分析

第3節 地理的領域の方法知(読図能力)に関するテスト問題分析

第8章 奈良県小学校社会科診断テストにおける 歴史的領域のテスト問題分析

第1節 歴史的領域の内容知に関するテスト問題分析

第2節 歴史的領域の方法知（年表読解・作成） に関するテスト問題分析

第9章 奈良県小学校社会科診断テストにおける 公民的領域のテスト問題分析

第1節 低学年における仕事労働に関するテスト 問題分析

第2節 中学年における公共施設・公共事業に 関するテスト問題分析

第3節 高学年における政治の仕組みに関する テスト問題分析

第10章 奈良県小学校社会科診断テストにおける 情意的学力のテスト問題分析

第1節 情意的学力のテスト問題開発の経緯

第2節 情意的学力のテスト問題分析

終章 研究の成果と課題

坂井氏の問題意識の一つ目の解は、第1章から第5章で展開されている。桜井プラン、奈良県小学校教育課程、奈良プラン、田原本プランを分析対象にして、指導教員である岩田一彦氏の知識の構造と、計画・予測、意志決定を問題解決と位置付けた視点を分析のナイフとしている。その結論を整理すると、次のようになる。

(1) 1949年度版「桜井プラン」から1952年度版「奈良プラン」までは、問題解決学習を方法原理とする初期社会科にもかかわらず、多くが事象の名称など断片的な記述的知識や分析的知識を想起・解釈させる問題が中心であった。

(2) 1954年度版「田原本プラン」では、同学年・同単元のテスト問題である「桜井プラン」と比較しても、想起、思考・判断、問題解決といった様々な解答能力を問う問題がバランスよく出題されていた。その理由は、「田原本プラン」は、構造的に設計された授業実践を基盤に、テスト問題の作成が行われていたからである。

坂井氏の問題意識の二つ目の解は、第6章から第10章で展開されている。

奈良県小学校社会科診断テストは、2020年で第60回を迎える。毎年その報告書を出し続けている。

寺尾健夫氏は「この研究がここまで長期にわたり、しかも評価研究部を中心とした綿密な研究体制のもとで、明確な評価方略のあるテストを通して評価の在り方と授業改善との連携を継続的に追究し、大きな成果を上げているものとして他に例を見ないものとなっている。」と高く評価している。

坂井氏は、奈良県小学校社会科診断テストを、地理的領域、歴史的領域、公民的領域、情意的学力の4点に分類し、分析している。分析の視点と方法は、次のとおりである。

(1) 岩田一彦氏の知識の構造と寺尾健夫氏の「想起→解釈→問題解決」といった能力レベルを視点にどのような知識をどのような解答方法で答えさせているか、その歴史的な変容を明らかにする。

(2) テスト問題の内容構成について、内容知と方法知を詳細に洗い出しているイギリスの『ナショナル・カリキュラム地理（2000）』をもとに分析する。

例えば、地理的領域の内容知では、「国土・郷土・環境」、「日本の産業」、方法知では「読図能力」を視点に、歴史的領域での方法知を「年表読解・作成」を分析視点としている。

第10章では、遅々として進まない情意的学力（「関心・意欲・態度」）をはかるテスト問題の妥当性と信頼性を分析し、改善の提案をしている。坂井氏自身が評価研究部の一員として作成した、1995年度の社会科診断テストにおける「はてな？からはじめよう」で、「なぜ疑問」が作成できたかで評価する信頼性を備えた問題を作成している。妥当性の質を高めるために、現実的な文脈を備えたストーリー性をもたせていくことの重要性を提言し、その開発を後輩に託している。新学習指導要領では「学びに向かう力」が位置付いた。坂井氏の研究の地平が開かれることを期待している。

本書の巻末には、奈良県の小学校社会科を支えた山本喜志雄氏をはじめとする多くの先達や、中興の祖と言える秋元直樹氏や馬場豊氏へのインタビュー記録が掲載されている。これを読むだけで、奈良県小学校社会科教育史が理解できる。

学習評価の歴史研究の労作として広く読まれることを期待したい。